シネマ日記

No. 79

○月×日　中国でも最貧困といわれる西南部の雲南省のある村。いつも霧がかかり、風がびゅうびゅう吹く標高3200メートルの高地だけに、作物といってもジャガイモが育つくらい。それを人間も豚も主食にして、数頭のヒツジやヤギ、鶏などとともに暮らしている。電気が引かれ灯が点ったのも数年前のこと。そんな寒村で暮らす「**三姉妹〜雲南の子**」（王兵（ワンビン）監督）の半年間の生活を追ったドキュメンタリーである。長女10歳、次女6歳、三女4歳。母は家出し、父は出稼ぎに行っている。近所に祖父や伯母たちがいるが、幼い姉妹三人だけの厳しい暮らしに変わりはない。煮炊きから洗濯まで姉が家事を取り仕切り妹たちは健気に手伝う毎日だ。マイクを付けた手持ちのカメラが一定の距離を置いて、姉妹たちの日常をひたすら追い続ける。音楽やナレーションもないかわりに、姉妹たちのふと漏らすつぶやきなども拾われており、リアリティに富んだ緊迫感のあるドキュメントになっている。といって子どもたちが自らを辛いとか不幸だとかの意識を持っているわけではない。そういう暮らしをして育ってきたのだし、他の暮らしを知っているわけでもないからだ。だからではないが、子どもらしい幼さや明るさの中にも、生きていくためのたくましさに感動を禁じえない。出稼ぎから久しぶりに戻ってきた父が妹二人を連れて再び山を降りていく。「三人は育てられないから」と、長女は村に一人残される。長女が静かにジャガイモを丸かじりする姿。幼いながらも生き抜く意思を感じ、胸が震えた。世界第2位の経済大国に成長した中国、その繁栄の陰に取り残されてしまった貧困の実態に、中国社会の現実が告発されている。

○月×日　孤独で鋭敏な感受性を持った少女の18歳の誕生日に、最愛の父が謎の死を遂げた。葬式に見も知らぬ父の弟という人が現れ、そのまま居座ることになった…。こうして「**イノセント・ガーデン**」（パク・チャヌク監督）風の広大な屋敷の中で、少女（ミア・ワシコウスカ）は不仲の母（ニコール・キッドマン）、魅力的な叔父（マシュー・グード）との三人暮らしが始まった。だが、周りでは相次ぎ人が消える一方で、夫の死を忘れて叔父にすり寄る母、叔父もまた母を誘う。にもかかわらず少女も叔父に惹かれていく…。こうして少女の愛と性の成長物語が紡がれていく。秘められた殺意と妖しいまでの官能と暴力。ラスト、大人の女に変身した少女の笑顔が怖いほどに美しい。

○月×日　生まれてすぐに親に捨てられ、30年間、天涯孤独に生きてきた男。冷酷無比な借金取りの日々だ。そんな男の目の前に、母と名乗る女が現れる。十字架から降ろされたイエス・キリストを胸に抱いた聖母マリアの「**嘆きのピエタ**」（韓国、キム・ギドク監督）そのままに、「母」の無償の愛に、男はしだいに目覚めていく。が、ある日突然、女は姿を消す。「ある復讐」を胸に秘めてのことだった…。不条理な人間の、どうにもならない愛と憎しみ。魂の救済はあるのか。

○月×日　「**グランド・マスター**」（香港、ウォン・カーウァイ（カンフー）監督）は中国拳法の宗師イップ・マンの生涯を描く。ブルース・リーに武術を伝授した男だが、日中戦争下の中国や戦後香港で、分派していた拳法を技と力で統一した。主演のトニー・レオンの武闘シーンはダンスの舞いのようで美しく、チャン・ツィイーとの秘めた恋はロマンチック。この監督ならではの演出だ。最後に、日本映画の「**旅立ちの島唄〜十五の春**」（吉田康弘監督）は、高校進学のため南大東島から沖縄本島への少女の巣立ちを描く。島唄に込めた別れと決意に、少女を応援したくなる。

（**内藤　哲**）